

アカネが有希奈で  
有希奈がアカネで  
鬼さん困っちゃう☆ミ

崖転落で異世界こんにちは

肆の巻

著者・ろつきゆん





奈奈



**瑠璃姫**



鉾羽アカネ



柳実姫央《ヤミミオ》  
こと  
ダーク・クィーン  
(自分イメージ)

## 崖転落で異世界こんにちは【肆】

ろっきゅん

誰に操られず、

誰に強要されず、

再度、新たな信念で挑む異世界天和へ――

### 序幕1の章

【血を浴びて、闇を斬る

人の怨恨を浴びて、人を捨てる……

遂にそれは化生と成す……

やがてそれは鬼と化す

ならば鬼哭啾啾（きこくしゅうしゅう）の怨嗟を孕む――

享楽の果てに辿り逝くは斬九郎……血涙塗れの無間地獄よ……】

先に聞こえた旋律を、

ビルから歌っていた有希奈の歌を模倣するように、その旋律はいつまでも響いていた。

完全に潰れた新宿駅のホームは、倒れた列車と崩落したビルによって周囲で青白い火花が散っている。疲労で今にも微睡みそうな視線を向けてみても、他に躍動する存在は見受けられない。

かつてこの地は魍魎魍魎の騒ぎに比較的被害を被らなかったのかも知れないが、結局は今回の騒ぎで災禍に見舞われた。

――むろん、闇漂木葉のせいだけではない。

それを重々承知してシュラは巨大な手の中に残った小さな欠片をボンヤリと見つめていた。

だが、それは束の間だ。

シュラは大地に刺さった変異した黒霧『異』へ手を伸ばし。

——キィ——  
ン！

背後から振るわれた一刀を、逆袈裟からの返し一太刀で振り払う。

しかも自らの巨軀が生み出す強大な力は、迫っていた太刀の使い手を「なんと!？」一気に遙か先、対面のホームだった場まで吹き飛ばした。

風に野球帽がはらりと落ちる。

さらに彼からぶわと舞ったのは銀の長髪。

そして常人ならない太刀筋を奮った太刀は黒霧『異』だ。

ふいに告げられる声が、流れた風が拾ってくる。

「信じられん、あの一刀を躲せる者がいるとは……」

『牙影……さんか?』

身体のパネで跳ねる様に起きる秀麗の男は、シュラの言葉へ冷たい眼光を飛ばしてくる。

全身に震わすは剣による闘気。

それは彼の纏う破れた衣服すらを波打たせる。

「——この牙影の黎弥、貴様のような瘴鬼に知りあいなぞ……」

『一度当てた太刀同士だ。その筋を思い出せば判るだろ……?』

その言葉に、牙影の面貌から血の気が引く。

水色のTシャツやジャケットも、そしてデニムズボンもボロボロに裂かれている。察するところ、先の噴水で、あの上に木葉と死闘があったのだろう。まさかそれほどの決意で、自分が守ろうとした男が、全裸状態で化物化してる等とは露にも思わなかったらしい。

「まさか……、いや馬鹿な!？」

眼前に立つ存在。それは巨大な大男。

すでに変異も進んだ鬼のそれ。

だが、牙影にしても手に残る太刀の感触は、はっきり真実を突き着けている。それ故に牙影

は驚愕の面貌を飛び越え蒼白となってぐらりと身体を揺らしたのだ。

「我が、君か……、月に猛る王なのですか!？」

『ああ、斬九郎だ』

「まさか、本当に我が君なのですか!? いや、確かに今の返しの筋、あれはあの森で受けた太刀そのまま。し、しかしその姿、まさか王が太刀に吞まれるなど!？」

『耳が痛い、仕方なかったんだよ……、望んでなった訳じゃない』

茫然と、そして滅裂に言葉を発する男へ、シユラは簡潔に心情を吐露するが。牙影はシユラの変貌に打ちひしがれるように、片膝を付いて戦慄く双眸で見上げていく。

そんな二人の間へ。

「本当よ黎弥。斬九郎ちゃん、自ら怨嗟を吞んで変じたのよ」

「その声は、彩香か？」

牙影の声へ呼応するように、柔らかな挙措で黒織部彩香が頭上から飛来してくる。

ただ、その懷に抱いているのは、先の戦いで風を操っていた卯月有希奈。

しかも姿は幼子になっているのだ。

さらに彼女の手には黒の扇が握られていた。

そんな二人へ怜悯な眼光を向ける牙影だが、初々しい挙措からはみ出る妖艶な女に対して間違いなく警戒の色が浮かぶ。

何故そんな顔をするのかシユラには一切解らないのだが。

「そんな顔しないで黎弥。彼は本当に斬九郎。そして我らの王——私もここで彼の変異を見上げていたから。そして彼女を討ち取った瞬間もはっきり見ていたわ」

秀麗の男は珍しくも『驚く』と言う感情を晒け出すように面貌を強張らせた。

「な、に……馬鹿な!? 討ち取った、あの闇の使い手となった魑魅の木葉をか!？」

驚く牙影に、シユラは握った金の菱形を見せた。

「そ、それは確かに木葉の黒霧、降の御魂。なら、……いや、となると——」  
「でも間違いないわ。だから間違っても王を攻撃なんかしちゃだめよ」

そこで牙影は何か思案をし、やがてスクと立ち上がると太刀を納刀した。  
そのまま再度流す双眼を黒織部に向けるのだが。

はたと止まって、彼女が抱き寄せる娘を凝視する。

「お前、その娘——」

「まさに問題はこっちなよね……この子、気づいた？」

「気づくさ。だがまさか。それにその娘、それは闇漂化しているのではないのか！」

「ええ、そうみたいね。貴方の握る太刀の兄弟刀の一つが、見事に華を開花させたらしいわね」

「黒霧が産んだ闇漂人だと……冥廟門を通さずに……造りだされた魍魎だと言いたいのか」

「ほんと……彩香ちゃんも信じられないわ。まさかこっちの子が闇漂化するとはね」

「それだけではない、その娘が抱いているのは——」

「黒の芭蕉扇、黒霧『邂（かい）』ね」

「天和で風を操った、かの芭蕉扇か？」

「これも木葉が渡したみたいよ」

「いや、まで。しかし何故それがここにある。それはあの御方の担ってる物のはず。あまつさえ黒霧の所有者は一人。他者が持てるものではない」

二人の会話は、今一つシュラには理解ができない部分があった。  
互い何かを知っているようだが。話の筋が今一つ解らずシュラにはピンとこないのだ。

そして困惑するシュラと同様に、ホームに抱き下ろされた有希奈が、きよとした眼差しをこちらに向け、にっと笑うと足が無邪気にぷらぷらと揺らした。

その挙措に、彼女へ幾つか聞くべきかとシユラも心揺らいでいく。

天和へ召喚された時。

シユラは彼女に告白をした。

冗談みたいな状況だったが、あれは間違いなくシユラの心からの言葉だ。

そして彼女は冷淡な台詞でシユラを捨てた。

シユラはショックだったけど、彼女の面影は迫る恐怖の中で、何度もシユラを元気づけてくれていた。そして何度も彼女へもう一度話をしてみたいと願っていた。

その彼女が、今まさにここにいる。

だからこそシユラは喉を鳴らして彼女の前へたつ。

無垢な眼差しで、怯えすらなく見上げる少女に、あの時の気配は微塵もない。闇漂化したかが為か、薄らと妖艶さすら伺える。

しかも——酷い違和感。

ただ、同時に自らの腕をみて、その不気味な姿で語り掛けるのは止めた方が良い気もした。余りに、自分は彼女へ語らうに相応しくない——そう思えて。シユラは成り行きに任せるよう沈黙する。

そんなシユラの背後で言い合いは続けていた二人は、やがて牙影の荒げた声で制されたのだ。

「彩香！ その娘——その娘は本当にこちらの世界の者なのか」

「そうよ。それは間違いない」

「なら今すぐその娘を殺せ、その女は似すぎている！」

突然の言葉。そして本当に太刀の切っ先を有希奈へ向ける牙影にシユラはぎよっとなる。が、本気で斬りかねない勢いに、慌てて間を絶つよう分け入った。

「——我が君!？」

『やめろ牙影。悪いがこの子は俺が、こっちにきて、知り合った子だ。だから……森で俺も驚いて、助けたんだ。気づかなかったのか？ あの時の、森で見た子なんだぞ』

しどろもどろになってしまう。

まさか自分の幼馴染、等とは口が裂けても言えない。  
言えばそこから禄武シュラの露見は想像に易いのだ。

そして牙影はシュラの言葉を受け取り太刀の切っ先を震わせた。

「あの時の……娘か」

『そうだ。あの時は薄暗い森の中、しかも木漏れ日の下で彼女は血と肉塗れだったから牙影さんには彼女の顔がはつきり解らなかったのかもしれないけど。あの時の犠牲者なんだ』

生温かい風が有希奈の髪を優しく広げていく。

その姿からはあの時の悲惨な姿の面影はない。しかも森で見せた血塗れに髪を肌へ張り付けた姿など一片も残らない程に、彼女は美麗も露わに微笑むのだ。

ただ、この間近でみつめてはつきり解る。

彼女は、間違いなく——幼くなっているのだと。

卯月有希奈は、間違いなく本来の年齢より幼くなっていた。

『何故、若返っているんだ……』

疑問を口にするシュラの脳裏に。ふ、っと木葉の今際（いまわ）の際（きわ）の言葉が蘇ってくる。

【……木阿弥……】

確か、彼女はそう言っていた。

思索に耽りだすシュラ。

そこへ牙影が言葉が続けて思考は一気に霧散する。

「確かに王の言う通り、あの時の血塗れの娘とはまるで別人です……だが、言われてみれば、確かに森でみた娘」

『だろ？』

「しかし、あまりに姫神様に酷似し過ぎている！ いやそれどころか、その娘はもう完全に闇  
漂化しているではありませんか!? しかも担うのが黒羽扇、黒霧『邂』<sup>かい</sup>とは。……王よ、私は  
この女を処分する事を進言する。余りに存在が危険だ！」

牙影は本当に惨殺も厭わぬ気配を発していた。

『牙影さん、もしも俺を本当に王と呼ぶのならさ。……頼む、この子にだけは手を出さないで  
くれ。訳合って、ちょっとした知り合いなんだ』

シュラはそう言葉を濁して彼を制し言葉をおくる。

それに眉尻を上げる牙影は、何かを強く放とうと口を開いたが、縋るように伝える自分の主  
君と仰ぐ存在の言葉へ、必死に言葉を飲み込み、それと共に切っ先を下ろした。

「我が君が……そう仰られるのならば……しかし、その女は必ず貴方を不幸に陥らせる！ 必  
ず貴方へ咎を向けてきますぞ！」

何故、牙影がそう告げるのかはシュラには分からない。

けど彼の眼差しは真剣で、決して自らの我欲での発言ではないのだけは、はっきり解る。  
シュラを守ろうとする意志も感じる。

「ありがとう……」

だからこそ彼の紳士な想いに応えたくてシュラは頷くだけに留めた。

釈然としないのだろう。やはり牙影は声が荒れる。

「——彩香、その娘をどうする気だ！」

「この子ってね、実は私の教え子なのよん。本来のかえるべき場所に送るわ。あ、それと、も  
う凜狂でいいわ。斬九郎ちゃんには伝えたからん」

そう告げ、シュラに見えるよう唇に当てる物がある。

『それは……!?』

シュラは、それを一目見て呻きをあげた。

「ええ、貴方の。でもちょっとこれ必要なのよ。だから私が頂くわ」  
彼女の握っているのは戦いの中で地上に落ちた式癒芙の幻術面。

『はいそうですかと行く訳ないだろ』

「貴方の為よん。貴方を旅立たせるために必要なの。約束するわ、使うのは一回。そして処分するから」

『旅立たせる……どういう事だ？ それに、何だその約束って』

それに応えず凜狂は有希奈を抱き寄せる。

そしてこちらを見て微笑むのだ。

その微笑みは、余りに冷たく……みるだけで不快感を煽る。

「凜狂、何を企んでいる。ただ家に送るとかではないだろう」

気づいたらしく牙影もシュラの隣から鋭く言い放つ。

その手は既に太刀の柄へ添えられていた。

下手をすると、一足で二人を瞬く間に両断する。

それだけの技術は彼は持つ。幾度かの相対でシュラもそれは把握している。

ゆえに蛮行を危惧し、どう止めればいいのかと迷いを帯びる。そんな牙影の殺気を削ぐように、凜狂は小さく嘆息して揶揄うように声を弾ませた。

「いいえ、私は企んでいないわん。企んでいるのは礫（れき）たちでしょ。そして貴方が考える必要はない……違う、一介の国司。海咬の牙影様」

「……貴様……っ」

『礫……』

——それは覚えのある名だ。

「確か木葉がいつてたけど……鬼焉衆（きえんしゅう）だが天津之……とか言っていたか」

「そうよ詳しいのね。いずれ貴方に絡んで来るかもね。でも、そっか。たぶん、これが依頼の意味だったのねん……最初は彩香ちゃんも意味が解らなかったんだけどん」

馬鹿にしたように凜狂が有希奈を抱き上げ、そのままホームの屋根まで飛翔する。

「黎弥、なんでこの子が黒霧『邂』を持たされたか解る？　そして本来の所有者はどうなったのか……いや、どうなるのかと言わなければならない」

「どういう意味だ……」

「貴方の役目はもうここにいる事じゃないって事よん。早く一人で戻りなさい天和へ。王も、どう足掻こうが、やがては再び異界の地を踏むわ。その時にゆるりと語らえばいいでしょ……もつとも、それは平穩無事な場所ではないかもだけどねん」

「凜狂、貴様何を考えている！　お前はこっちに身を寄せたのではないのか！」

「事情が変わったのよ。それにこっち夏休みなのよね。ちょっとした里帰りって言うのかな？　また天和へ赴くわ。だからまた逢いましょう」

「……お前にまた逢いたいとは思わないがな」

「つれないわね。あ、斬九郎ちゃん。少しだけお別れ。でも、必ず貴方の元へ戻るから。もちろん、お嫁さんとして……だから少し待ってほしいのん」

「戯けた事を……お前などに王が靡くか——」

牙影の太刀が閃き、足場を剣気のみで破碎させる。

その凄まじい技量にシュラは凝視するが。

笑う凜狂は、抱く有希奈の手を動かし彼女に突風を起こさせた。

凄まじい突風に二人は視界を遮られ。

二人が眼差しを向けた時には、そこから凜狂の姿は霧散していたのだ。

シュラは直感する。

もう二度と、この地で凜狂を見る事はないのかと……

甘く纏わり憑いた残り香が、風に完全に散り果てるまで。シュラにはそう思えて仕方がなかったのだった。

風のみが吹く世界で。

呻く牙影が納刀と同時に儂げな微笑を湛えると、乾いた笑いをあげていく。  
その行動にシユラですらぎょつとして、さすがに彼の挙措を危ぶむが。

「三鉈杵の死といい……木葉の反乱といい。そして貴方の御姿といい。我が王よ、ここは、私にとっても本当の地獄のようです……」

変貌したシユラを否定するように彼の声は酷く震える。

だが、シユラはそれに喉を鳴らして答えた。

『三鉈杵、彼も死んだのか……？』

「はい。燃える病院の中で、私が駆けつけた時には既に……」

『そう……か。病院で彼女、有希奈を守って貰ってたんだが。この状態に至って、もしやとは思っていたんだけど……そうか、殺されるなんて……、俺が一人にしたばかりに……』

あの時、封じた有希奈を餓鬼から守ってもらう為に、シユラは彼に全てを任せた。  
それ故に……また人が死んだ。

「王よ、まさか後悔されてるではありませんまいな」

『しかし……』

「貴方の為に働く。それは彼も望んで天和を旅立ちました。ならば彼も本望で御座いましょう。  
あとは貴方が後悔をせず……むしろ、褒めてやって下さる方が彼も喜びます」

そう牙影の黎弥は言葉を纏めるが。

『なあ、凜狂の言った本来の所有者とか、もたされたとか……どういう事だ』  
突然有希奈が奮った風の黒霧を思い出しての発言だ。

「我が君。あれは……あの本来の所有者は、姫神の絃羽アカネ様の物でございます」  
『アカネのって、でもあれが黒霧なら!？』

「はい。黒霧の所有者は太刀にとってただ一人。ならばあの黒霧が、この黎弥の知る唯一の

刃を持たぬ武器ならば、本来の所有者は……殺されたか。あるいは封じられて黒羽扇が渡ったか」

『馬鹿な——あの子が、巫女のアカネが死んだって言うのか?』

天和の地へ赴き。

初めてあった少女。

少し無茶な行動をする彼女だったが。そんな彼女が殺されたとあれば、シユラも心中穏やかではない。今すぐ天和へ赴き事の真意を確認したい。

だが状況はそう単純ではない。

それを認識し、凶悪な犬歯が噛みしめられていく。

「あくまで仮説です。第一、それで話に聴く黒霧の所有者が変わると思えません。だからこそ、私は事の真偽を把握する為に一度天和へ戻り、取り急ぎ確認したいと思います」

『戻るって……帰りの珠はあるのか』

「予備に持参した木葉の珠を預かっております。それで戻った後は、そのまま蓬萊へ向かいます。どうすれば木葉が、あの黒霧を所有者から引き離れたかは存じませぬが。仮に姫神様が生存されていた場合、もしかしたら、あの凜狂……」

『凜狂?』

「黒羽扇を持っている以上、蓬萊で姫神様を殺め、あの娘を替え玉にするやもしれません」  
『替え玉って。そんな馬鹿な……』

「あの女が一体何を考えているか判らない以上は警戒は必要かと」  
『それにしたって……そこまで凜狂がするだろうか』

あれでも一応、自分の担任だったのだ。  
確かに人を食ったような女だが、自分の目論見の為に他人を殺めてまで行動をするだろうか。

それもあるってシュラも立ち尽くすが。

「いや、それもありえる」

その声は、突然天から飛来した。

大気を巡る愛らしくも澄んだ声は、突然頭上からもたらされた。

人の逃げ出したホームの真ん中で、それは崩れたホームの上から声がした。

二人が見上げれば、そこに師匠の娘、と同時にシュラの師匠でもある、小さき奈奈が見知らぬ少女と立っていた。しかも足元には弦の切れた錘籠があり、その姿威風堂々と風を受ける姿にシュラは瞳を見開いていく。

『奈奈……本当に奈奈か!?』

「ほんっと。唐変木だな。お前はよ。自分の嫁まで忘れたか」

小さくも抑揚のない……そして優しい囁きが、変異したシュラへと囁かれていく。  
そして、何故か強く嬉しい気持ちに包まれていた。

『まさか……忘れる訳がない。けど俺——』

「どうした？」

『だって、だって奈奈、判るのか!? この俺が!? こんな姿なのに!』

既に背丈は人の倍はある。

蠢くように躍動する筋肉も。そして重苦しく飛び出た巨大な額。顎まで伸びた長い髪。

とても今までの禄武シュラの姿ではない。

それでも唐変木と呼んでくれた事が驚愕と同時に嬉しくて、掠れた声が、ようやく絞り出された。

「ああ、判るさ。その心底阿呆の氣は、お前だけだ!」

『相変わらずお前はきついな!』

あの時、もう戦えないと宣告してから……二度とともに声をかけてくれなかった少女。

それが、今、紅月を背負って話しかけてくれている。それだけが酷く懐かしくもあり、嬉しくもあって。シュラは眦から溢れそうになった物へ慌てて腕で擦った。

そんなシュラの言葉に、奈奈は胡乱な半眼を眇めていく。

「先の話だが、あの女、遠目で見てたが、やはり弥勒の凜狂だな。こっちに來てるとは」

『そこは後で詳しく話すよ。それよりさっきの“ありえる”ってどういう事なんだ』

促しに奈奈は小さく頷くと、ホームの上から言い放った。

「白亜月に生まれた娘にして伝承の巫女と姫。そして伝承の紅き月に生まれた男。つまり降臨した月に猛る王と結ばれるなら、そこから生まれる赤子は人の世の救世主。つまり、その一つを魑魅である女に変えれば、救世主すら魑魅へ取りこむ事が可能になるはずだ。そして……」

そこで奈奈は牙影へ眼差しを向け言葉を閉ざした。

それに嘆息する牙影は。

「ふ、奥方様には信用されていない御様子か——王よ、私は取り急ぎ、この近くの地にある風穴より天和へと戻ります。既に三鈷杵の亡骸も運び終え、出立の準備は整っております」

『そ、そうか、わかった。いずれ……向こうで会う事もあるんだろうな』

「無論です」

そう言い転がった野球帽を拾うと、何故か牙影は名残惜しそうに眺め。そのまま深くかぶっていく。

『牙影さん……？』

「いえ、なんでもありません。王よ、この牙影の黎弥は貴方様の為には身命を賭して馳せ参じる所存。何かあれば海咬へ文を下さい。とり急ぎこの黎弥は蓬萊の智羽殿に掛け合い、兵を回して姫神様の護衛に掛かりたいと重います。そしてこの危険な太刀ですが。これはもう少ない方がよろしいかと」

『少ない……つまり？』

「折った方が良いな」

牙影の意を汲み、困惑するシュラへ奈奈が簡潔に教えてくれる。

『変異の魔刀——確かに無い方が良いが。しかし、これは折ろうと思って折れる物なのか？』

「黒霧の真打でもあれば問題はないでしょうが、まともな方法では無理でしょう。ならばここで出来る方法とすれば互いを打ち合わせ一つを消滅させるのみかと」

『つまり、二つで潰し合うのか。そういえば木葉の話ではこちらに持ち込んだのは十七本とか言ってたな、そのうち十五は消滅してるみたいだが』

「なら、問題はありますまい。これでどちらかが折れ、最後の一つとなるはず」

——それは、今のところ……ではないだろうか。

かの天和の何処かには、まだこれの兄弟刀が存在している可能性はあるのだ。

それを思っ、シュラは今後一体どうするべきなのかを考えてしまう。

そんな騒乱の幕引きとばかり、牙影の黎弥は左構えに移行する。シュラも遅れて左脇構えで相対する。

変異前の魔刀と。

変異して大剣と化した魔刀。

「奈奈が合図してやろう」

奈奈が石を拾う。

「それでは——」

『行くぞ牙影さん』

奈奈がひょいと放てば、その石は放物線を描いて二人の間へ落下していく。

コッ……

その小さくも重い音を合図に、二人は同時に踏み込んだ。

——キィ——ン——

小気味よい音を立てて。

牙影の太刀が中ほどから吹き飛んでいく。

「これも……運命ですかな」

『え?』

「いえ、こちらの話です。我が君よ、機会があればいずれその魔刀も」

『ああ』

「特にこの太刀は、今後唐変木にどう作用するか判らん。早めに手放した方が良い」  
奈奈も促してくる。

『そうだな、俺も黒霧の真打に抗う為に、こいつにいつのまにか頼り過ぎていた……機会が到来したら、確実に壊そう』

頷く奈奈と顔を見合わせるシュラへ。

牙影がコホンと小さく咳払いをした。

「我が君。それと……その、今度会う時は」

『え?』

「お願いですから……私の事は黎弥と呼び捨てて下さい」

少し無然とした声で言われ、シュラは一瞬きよんとするが。

「シュラを上に見る以上、その下の者へ、いつまでもくどい敬称は……その武人に対しても。そして周囲のその武人をみる眼差しからも、時に失礼に値する」

奈奈の告げる言葉に、シュラは牙影へ視線を走らせ。その視界に映る秀麗の男が少し悲しげな気配を漂わせている事によく気が付いた。

鬼の巨大な姿のまま、滑稽な仕草で両手を振ってしまふ。

『わ、わかった、ごめんな。れ、……黎弥』

シュラの言葉に、牙影は破顔し一礼する。

「できれば、その謝罪も無用です」

『そ、そうか。難しいんだな……武人の作法って』

シュラの挙措に屈託なく笑いを上げた牙影は、やがてもう一度、深く一礼する。  
そしてその面貌にはもう微笑はなく、ただ真摯な武人の双眼が宿っていた。

「王よ。こちらの身辺整理が終わりましたら……必ず天和へ。私もバッテリーセンターに電  
話をして暇乞いをしたのち旅立ちます」

『……そ、そうか』

「凜狂の言葉ではありませんが、たぶん次に会うのは戦場の恐れがあります。それまで互い息  
災でありますよう」

『ああ、また逢おう』

大きく頷くと、牙影はその俊足で見知らぬ方向へと走り去っていった。

シュラが牙影を見送り、向けた眼差しを奈奈へ戻していく。

もちろん、伝えたい事が山ほどあるからだ。なのに、視界に映る少女は、先までの胡乱な眼  
差しながら不遜に小さな鼻を鳴らす様相ではない。淡々とした素顔を払拭して、下唇を強く噛  
みしめてのへの字の口。

それは、何とも感情の表現のし辛い、悲しみのようにであり、また怒りのような面貌を向けて  
来ているのだ。

これにはシュラも驚きを隠せなくて。

『な、なにその顔……』

「言ったよな！ 太刀はもう握るなと！」

『……え、あ、あう』

冷たい、余りに冷たく、問答無用といったげな鋭い声を叩きつけられてしまった。

それに返せずシュラは黙し。

風が、生ぬるい風だけが、二人の間を吹き抜けていく。

「こうなると、薄々解ってた……。見ろ。この酷い人死にの地を！」

『……だ、だって』

「だってじゃない。お前は、お父から習う修行を、こんな連中を殺す為に会得しているのか！」

『——!?』

舌鋒鋭い奈奈の叫び。それは既に悲鳴に近い。

しかも全てがシュラへ叩きつけられた正論以外の何物でもない。

だから、シュラはその言葉の重みを受け止め——肩を震わせた。

「お前が無事太刀を奮い、錬気を奮うのは奈奈も嬉しい。けど、なんだこれ！」

『……』

「違うだろ、血を浴びる為にそれを向けるんじゃないだろ！ 人は斬らなければならない、でも、それは何の為だ！ 今一度、あの時、奈奈の庵で言った言葉を言ってみろ！」

叫ぶ強い言葉に押されて、無意識ながらもシュラは上擦る声をだす。

『……守る……為だ。絹や、俺や……それから出会った……大切な人を……』

「なら、これは何だ！ これで誰を、お前は一体何を守りたかったんだ！」

普段、小馬鹿にして、いつも揶揄う少女の奈奈。

それはなんだかんだと、シュラが迷う森の中を、まるで光のように、小さな道標になっていた。先を示してくれていた。

もちろん、それはシュラも薄々気づいている。

気づいていたからこそシュラは肩に乗る奈奈へ、いつも掌をあてて、それに奈奈が煩わしいとばかりに跳ねつける。

それは、一種の二人だけの心通わせていた時間の中での阿吽の呼吸みたいな物だ。

そしてそれこそが。無意識であつただろうがシュラが皆を、自分を守るという決意で歩いているという証を。今日も頑張っているのだと……それを奈奈へ見せつける様な行為。

辛い道程の中で、ただ奈奈へ感謝を込めてまさぐる意思表示みたいな物だった。

そして奈奈も気づいていた。

シュラが己が自分の父親の前で放った言葉を、今日も体現するように歩んでいる。そして、いつも肩に座る自分へ、今日も頑張ったぞ。と、そう伝える様に掌を向けているのだと。

だからこそ奈奈も嬉しくも擦りたい気持ちで、跳ねつけた。

そして、進む道を二人で見ている。

——なのに……至った道は、血涙地獄——

道で花咲くのは無情の暴力だ。

この平和の世界の無力な人間が成す術も無く利用され、そして戦火に巻き込まれ、何故自分がこうなったかすら知らず怨嗟の悲鳴をあげて、利用する女の蛮性に巻き込まれた。

支配的な力を奮った猛威の中で風にとばされ、塵芥のように翻弄された。

——そして、相対した。情を捨てた鬼に、成す術も無く殺された。

生きた先に待っていたのは、血を染める夥しい骸の絨毯。

その現実を。怨嗟の荒野を埋め尽くした叫びを知るように、今、シュラは幼い少女に現実を突きつけられた。己の至った行為の本当の意味を知り、シュラは奈奈の前で今さらながらに茫然とする。

……その双眸を、ただ震わせていく。

そして奈奈は……

「誰に唆されて、こんな事をしたのか知らないが、それでも今生きてるのを、お前は幸運だと思ってるのか！」

続く奈奈の言葉が震えている。

明確な怒り——それにシュラは返せない。

それどころか、今はつきり一つの事に怯えている。

「お前は、死ぬところだった！ あんな精神状態で。あんなに悲しんでたお前じゃ、奈奈はもう復活するのは無理だと思った。死んで欲しくな——」

そして奈奈は……

そこで言葉を飲み込んだ。

そしてびくりと小さな身体を震わせたのだ。

理由が解らずシュラは奈奈を見おろした。

足元で立ち尽くして、怒気荒く震えた奈奈に怯えながらも。

シュラは殴られるの覚悟で片膝について身を沈めていく。

奈奈を、ただ見たくて。

『奈奈……？』

そしてシュラは呻く。まさに有り得ない物を見たからだ。  
ぐいっと袖で双眼を擦る奈奈。

奈奈が、泣いていたのだ。

向けた眼差しに気づいて、奈奈がカッと怒りを露わにする。

「——そんな姿になっちまって、どうする気だこの大馬鹿野郎！」

張り上げられた言葉に、シュラはただ息を飲む。  
珍しく、彼女の強い感情。

それよりも、本気で悲しんでくれている奈奈に。  
自分がやっている事が恐ろしく思えて来た。

「ねえねえも、絹ねえも、あの姫も、お父も！　そしてお婆。一体どれだけの人にその姿を晒す気だ！　ほんとに、ほんとにお前、お前……お前はアホシュラだ——！」

街の音も無くなり、人の鼓動すらない世界を、ただ風だけが過ぎていく。  
まるで奈奈の放った絶叫だけを、広く躍動の無い東京へ響かせるように、まき散らしていくように風が唸っていく。

『奈奈……』

「勝っても、こんなじゃ誰かから恨まれる！　恨まれ続けて生きる者が、後に至るは苦しみの沼へ沈むだけだ！」

奈奈がぐずりながら告げる言葉。

それへシュラは明確な答えとして受け取れない。  
何を伝えようとしているのか、自分でもよく解らないのだ。

けど真剣に何か大切な事を伝えようとしているのは、はっきり判る。

それゆえに返せず、ただ。何も言えず。抗う言葉も一切なく。

シュラは崩れる様に両膝を付いた。

大地にドサッと転がる巨大な大剣。

その横で、シュラは静かに項垂れていく。

そして、酷く怯える。

——破門……

過る言葉がはつきり解る。

そう告げられ、捨てられるのが。

この状況でその結末へ至るのが……

——いや、違う。

奈奈に見捨てられるのが……怖いんだ——

それがもう間もなく告げられる。そう予感できて、それにシュラは恐怖を覚えている。

そんな震えたシュラへ、奈奈は凄まじい速さで飛来した。

それにシュラはよけようとも思わない。

ナタが振るわれ、その首を掻っ切る。

そんな行動を起こされても、もう構わないと思う程、ただシュラは奈奈に身を任せただかった。

なのに——奈奈はシュラの巨大な顔に飛びつき。

……抱きしめて来た。

訳が分からず茫然とするシュラは置いて。

「それでも、やっちゃった事だ、心をまた怯えさせるな！　せめて、せめてこのどうしようも無い状態でも。もう二度と弱心（よわごころ）に至るな。至れば、この殺し尽くしてまで震えるようになった——お前が生き残ろうとしてる事さえ……無為に至る！」

『奈奈……』

「お前は道を間違えて進んでる。でも、弱肉強食ではないが……やっちゃったんだ。だから、死肉を喰らってでも——生きなきゃならない」

『間違ってる……のにか？』

「そうだ！ お前が辿りつく道は、お父が望んだ安穩と至る平和への道だ。でも、お前は道を踏み違えて、悪鬼や羅刹への道を進んでる。それでも、お前が弱い心を露呈して、太刀を握れなくなるくらいなら、それすら潰して歩き続けろ。その鬼の道を踏破しろ！ そのつもりになれ！ いつか……望んだ辿り着くべき道まで……いけるように進むんだ……」

——自分だけ、いずれ平穩へ？

こんなに、人を殺したのに……

だれでも思う疑問。

それを、彼女は一蹴しろという。

そして奈奈はただ巨大な顔に獅噛みつき、抱きしめ、声を殺して泣き続けた。

シュラが流したい涙を肩代わりするように奈奈は……泣いてくれていた。

ただ、シュラはその身を奈奈に任せていた。

やがて、奈奈は言う。

「戻らないと、な。こんな、身体じゃなく………本当のアホシュラへ」

そんな彼女にどう応えていいか判らず、ただ掌で奈奈を抱きとめた。

『……うん……』

それに奈奈は強く抱きしめられて……

異様に大地を染める紅月の元で。

シュラの語れない本心すら内包するように、醜く爛れた肌の元で彼女は泣きじやくる、本心から嘆いてくれる奈奈を宥める様に。その紅月だけが、せめてと彩だけを添えていくようだった。

それからどれだけ時間が経ったのだろう。

「……ふう」奈奈が、溜息。「……悪い。少し言いすぎた」  
ぐすつと鼻を鳴らす。

『……いや、俺が、やらかした事だし』

「でも、絹ねえねえの為……だったんだろ？」

耳元で告げられた言葉。

シュラの肩が強張っていく。

『そうだ……。絹は——みつからなかったんだ。俺が今殺した木葉は、絹を殺したと言っていた。だけど、俺には実感がなくて。ただ無心に……俺も木葉を殺した』  
そんな時だ。

「ふえ。御主人なら、無事なですよ？」

二人の空気を一切気に掛けず、突然奈奈と同伴していた少女が明るい声を張り上げた。

『君は？』

「絹様の従者で珠来<sup>みこ</sup>というです。よろしくなのですよ！」

『珠来か、こちらこそ。ところで無事って』

「お前さんが倒した冥廟門の妖魔。あの女が御主人様を殺そうとしたので、この身で身代わりになったですよ。だから無事なのです」

『身代わりって……あ、ありがとう？』

「いえいえ、喜んでいただいて何より」

『でも、君は大丈夫なのか!？』

「こいつは死者の国の住人だ。殺せるような存在じゃない……それよりこれからどうする？」

補足する奈奈の言葉。

人の死体と瓦礫の散りばめられた大地の上でシュラは立ち尽くす。

そしてこの大地の上で、無数の瓦礫の中で、道は誤れど、シュラは凜狂の言葉で復活した。  
ただ、その時に凜狂は言っていた。

『どうすればいいか。君のお嫁さんなら気づいてる……同じ死の臭いがする娘』

『奈奈、もしかして、この騒ぎの治め方、お前は知っているんじゃないか？ 黒織部が、あ、あの凜狂だが。あいつこっちで俺の教師をしてた奴なんだが、あいつが言っていたんだ。お前なら、何か方法を知ってるんじゃないかって』

「知っている」

『本当か!?!』

シュラの勢いに奈奈が頷く。

けど、首を傾げる。

「だが、ここまで騒ぎが広がったら……試したところで、もう収集はつかないかもしれない。  
もしかしたら……お前ももう二度とその姿から戻れないかもしれない」

『……』

「既に時の軸は、この強烈な出来事を基本とするよう固定されていくはずだから……」

『よく、解らないけど……方法があるんだな?』

奈奈は黙る。

『教えてくれ、もう、試せるなら……なんでもやるしかないんだ』

奈奈はシュラを見つめ。

そしてその巨大な顔に一発拳をめり込ませた。

『いった!?!』

「うるさい。お前はとにかく……元を絶て……それしかない」

『元……これの元？』

元って何だ……とシュラは迷う。

木葉が来た事？

それとも最初の鞘が配られた事？

『意味が解らない……元って言ったって——』

いや、まてよ……と。

シュラの言葉が止まる。

木葉も、そして太刀が配られた事も。それらは元……つまり基軸にはなりえない。何故なら、それら全ては災禍の中心からの、継続的な行いでしかないのだ。

災禍の中心。

この騒ぎの、本当の中心とは……

そこで、辿って。知る限りを思い返し、やがて一つの結論に至っていく。

だが、少しこれでいいのかと迷う。

シュラはただ奈奈へ眼差しを向ける。

そしてその挙措を見た奈奈は、肯定するように頷いていく。

『——俺が、天和に……来た事か』

自分の存在。

月に猛る王の存在。それを追ってきた木葉。

持参したのは、月に猛る王が、この地より持ち込んだ——過去に人を斬る為に編み出された武器。そしてこの地の鉱石。

「そうだ。厳密に言えば、撒かれた太刀も、そしてその太刀からも、全てにはこの大地の鉱石と、そしてアマツマラによって取りだされただろう技術が集約しているからだ」  
『それって、つまり』

それに奈奈は鋭く半眼を眇めて、有り得ない事を言い放った。

「——つまり、坂を下って、件の元凶を持ち込んだ、最初の王——祿武シュラの太刀を破壊、もしくは回収するんだ」

『回収って……時を遡るのか!？』

「それでもなければ、この騒ぎ、もう収める事はできない」

『もしかして、さっきいった固定って』

「そうだ、ここまでの騒ぎだ、時が戻っても平穏な世界にはなりえない。例え太刀を潰しても、もうこの惨劇はあったもの。それでも要因たる太刀の無い世に成り替わる可能性はある………自信はないけど」

『それで……時を戻る……か。なら、もしかしたら、その時に彼女へ危険を告げにいけるんじゃないのか?』

「危険?」

『さっき牙影が言ってたじゃないか。凜狂が姫神の絃羽アカネを殺して有希奈と入れ替えるって、なら、太刀がアマツマラに渡る前に奪取した時に、一緒に迫る脅威を伝えられるなら』

「おお、一石二鳥なのです!」

感嘆の声をあげたのは珠来だった。

「確かに……だが、あまり薦められない」  
奈奈が不安そうに言葉を継ぐ。

『何故?』

「それなら上手く事が運ぶかもしれないが。けど、下手をすると天和に何か影響をおこすかもしれないんだぞ」

『そ、それは……』

「正直薦めたくない話だ」

『でも、他にこの惨状と、アカネを救う方法はないんだろ？』

「それはそうだが。あのアカネ云々は牙影とかいう男の推測でしかない。もしかしたら襲わいかもしれない。もっと別種の意味があって……」

『本当にそう思うか？』

シユラの言葉に奈奈が口をへの字にした。

『あの凜狂。俺のこの世界の先生で黒織部彩香ってんだけど。あれ、——どう思った？』

「胡散臭すぎた女、そう思った」

幼女がバサリと言い捨てた。

『だろ？　なんてったって、俺がここから逃げ出して天和まで行ったきっかけだからな』  
「たぶん、何か悪い事を企んでるのは違う」

『あの女も有希奈の先生だ。そしてアカネの酷似した顔は気づいている。なら、有希奈を連れていく以上、やはりアカネ関連と考えるのは……自然と思うんだけどな』

それに肩に乗る奈奈が腕を組む。

やはり、そうとしか考えられないのだろう。

「尚且つ問題がまだある」

『なに？』

「希望の時、その望む時に行かなければ意味がない。そして坂を昇る時も下る時も、鍵になる強い珠であれば本来の時には出る。そして弱い珠なら不安定な時の流れに巻き込まれ、何処かへ飛ばされる。けど……望む時間にいくなんて……」

奈奈が言葉を濁す。

ほとんど不可能なのだろう。

——けど、それに思わぬ助け船が来てくれた。

「伊賦夜の坂は、時のねじれる地……珠来の故郷なですよ？」

奈奈の眩きに、擦ったそうな笑みをむける少女が跳ねてくる。  
自分の唇をぷにぷにと擦りながら、楽しそうにシュラを見る。

「他ならぬ御主人の旦那様になられるだろう御方。この珠来みこひとはだも、ふたはだも脱ぎましよう」

『何か策があるのか？』

「策というか、この珠来が呼ばれた珠。招来の珠の力を坂で使えば、一度くらいは望む時へ戻れると思うのですよ……ただ、時間が限られてるので、その後は強制的に坂に戻らされます。下手をすれば珠は消えまする」

『消える……でも、望む時間にいけるのか！』

「はい」

『なら、俺を連れて行ってくれ！』

「どこの時の軸へ行かれるのですか？ 凜狂の暗躍前、そして災厄の太刀を持った貴方の出現前ですよ。でもあまり前に行ってもダメなのです。この珠は、そんなに長い時間滞在できかねるのです。たぶん、せいぜい三日……相当、その時の望む軸を限定しないと」

シュラはその深い双眸を細め、やがて笑い出したのだ。

それに奈奈も珠来も呆氣にとられる。

『なるほど……こういう事だったか』

誰かに言われた。

全ては、決まっている決まり事。謀なのだと。

その気配を、シュラは今更ながらに感じていたのだ。

かつて、夏休みに入る夏の教室で。

緑武シュラは黒織部彩香に宣告され、この日本の、そして千葉県の高校から逃げ出した。

そして父との諍（いさか）いの中で掴んだのは一振りの太刀だった。

ただ無心に、それだけを握り、消されていく森と自然の泣き喚きに背を向けながら、手に入れた蒼い勾玉で異世界への門を開いていく。

全ては天和の地で、巫女の呼び寄せる儀式においてシュラは転生して降臨した。

「アホシュラ。時間は、おおよそ決めてるんだな」

『ああ、まずは様子を見る為にも、あの日の前日へ行くんだ』

世を救う者と示唆され、そして太刀黒霧『斬』を受け取った夜に全ては豹変する。

闇を漂わす魍魎魍魎と相対し、周囲で瞬く間に吹き荒ぶ血風が舞い上がった。

山へ逃げ、二万五千の手勢に追われて巖師匠と、稍と、そして肩に乗り続けてくれる奈奈と出会う。

神仙を昇り。

人の魂の下る世を見て。

やがて敵となって現れた兄弟刀、新たな黒霧と相対した。

血と、嘆きと、蘇生の中に綴られた道は、気づけばこの地に戻され、持ち込んだ太刀の型抜きより生まれた太刀によって、再び周囲は血煙が舞い、地獄と化する。

それはその身体に、新たな血を浴びさせ、辿り着く先は鬼へと変異する鬼道だった。

「御主人の旦那様、貴方の求める時、それはどこなのですか？」

ならば、その原点は。

『決まっているさ——』

全ての元凶は、祿武シュラの存在。

そして……飛び込んだ世界で握っていた太刀に集約している。

あの日、巫女を助ける為に奮い、その代償に手を離れた父の太刀。

それを取り返す為に……

「俺が呼ばれた……春嘆の宵月へだ！」

シユラは、新たな仲間と共に旅立つ。

激動の天和、過去の異世界へ。

そして、そこで巡り合うのだろう、まるで背負い籠の錘のように圧し掛かる悲哀の運命を……

何故かシユラにはそう感じる図にはいらなかった……

\*\*\*\*

「ああ、くっそ、泥濘んでるじゃんかよ。このズボンいくらすっと思ってたんだ!? てかお前も土地を売ってやったんだから、さっさと切るなりナパームでも落とすなりして、一気に焼き払えってんだ!」

焼酎焼けた掠れた銅鑼声が闇に包まれた森に響いていた。

大気に乱雑に吐き出されるのはアルコールをふんだんに含んだ濁りある臭気。その澱気に隣の男は鼻を顰めながらも愛想笑いを浮かべていく。

歩けど終焉の见えない昇り坂。

斜面の一部には、道へ沿うように斬り捨てられた切り株が残り、寒々とした様相を示すと同時に荒野となった麓を展望させる。

眼下に残る大樹の群れも、もう間もなく伐採が始まるだろう。

その頂きへの一本道を、中年の男二人が歩いていた。

森の続く大地は未だ湿っている。

まるで残った木々が斬られた仲間を忍ぶように、日中の日照を遮り、慰めの水打ちをしたように水濡れが残っている。その為か、夏だと言うのに全身を締め付ける異様な冷氣すら漂っていた。

山の坂道は森閑としてスズムシも鳥のぐずり鳴きすらなく、まるで何かを怯える様に身を潜めている。

その中を進む二人の男の一人は、でぶりと太った腹を黒と灰色のスーツからはみ出させ、胸元には白金と金で彩られたアクセサリーが虚飾のままに宛がわれている。

もう一人はいかにも工事人風の出で立ちの男だ。

双方どちらもヘルメットをかぶり、タオルを肩から掛けている。

そして工事人の男は、ただただ相手の愚痴に相槌を打ち、間が空けばおべんちゃらだけを伝えていく。

「金餅さん。気持ちには私共も重々理解しておりますが。これだけの森ですから、木の一本でも価値があるのです。国産ヒノキや国産杉。拳句に御神木の樹齢から床の間に飾る大黒柱に、玄関先の一枚板など。用途も多く、えっらい金になるんですよ」

「用途つつたつてな。こっちの分け前が6・4ですくねえよ。箱物建てねえと次の金が俺んどこ入んねえんだからよ」

「それは重々承知の上で作業も急がせておりますから、もう暫くの辛抱を」

「ああ、キャデラック買うぞ、キャデラック。まったく相続税だけが面倒くせえ。けどよ、当初の予定より遅々として進まねえってのはどういう事だ。これで急がせてるのか？」

「は、はい……」

「うるせえ親父が死んでようやく金が入るってのに。あ、お前、近隣には上手く言っただろうな」

「ええ、市の届出には住宅500棟（むね）。町内会には日照は確保と。後はこの頂きの社を潰して上に養護老人施設を作り高齢化社会に対応させ、麓の小学校で遊ぶガキ共を拝めるように工夫させ、自然と一体型の素晴らしい建造だと伝えてあります。住民は渋ってましたが、町会長の方へは——ね。理解してもらえましたよ」

「うっせえからな、うちの町内会は。特に副会長の禄武のおっさんが」

「あの人への包み物は無理でした。一喝されましてね。今にも斬られそうな気配だったので、逃げるしかありませんでした」

「まあ、あのおっさんとは娘がいるからな、いざとなったらお前んとこの事務所の若い衆で軽く粉かけときゃ、すぐだんまり決め込むだろうぜ」

「それが、マル暴があるので、あまり過激な事はまずいんですよ。すぐ足が着くと申しますか……」

「そこを上手くやるのがお前らだろうが！」

男が弱腰の工事の男を一括する。

それにも愛想笑いを浮かべていくが。

「それより一階の施設は構いませんが、建築課から許可が出てないんですよ」  
おもむろに話を方向転換させていく。

「あ？ 立ったもん勝ちだろうが、立てちまえば役所は壊せねえだろ？」

そこで、工事人の男は押し黙る。

「なんだよ、まだなんかあるのか？」

「あ、いえ、ここ鎮守の森じゃないですか。上には社もありますし、なんとも薄気味悪くて。  
神仏系の撤去は、色々変な事が起ると聞きますし……」

「バーカ。拙しい貧乏人が持つてるもんを泣く泣く売って金を作るんだぞ。神さんも喜んで  
どっかいつてくれっだろうよ。第一、その為にいま金目の物を取りに来てんだ」

「は、はあ……」

「あそこの御神体も、金にしちまわねえとな。そうすりゃ金持ちのところにいつて、神様も大切  
にしてももらえるって寸法よ。へははははは」

男の下卑た笑いを聞きながら、工事の男は溜息突きつつ肩にかけたタオルで頬を擦る。しかし、  
あまりに冷ややかな大気は、夏でも汗の一筋さえ垂らしていなかった。

泥濘の山道が無数の落ち葉と枯枝、そして歳月に晒された石畳の参道へ変わっていく。

鳥居もなく……

掲げる名すらない……

ただ荒れた……誰も参拝も無い山の社。

だがそこは、不思議な気配が確かに漂っている。

荒れてはいるが、まるでここから先は淀む者の立ち入りを一切許さぬ、そんな気配を大気から  
感じるのだ。

それゆえに工事人の男は、幾度も来たこの場所だが、日中とは違う夜の廃社に怖気を覚え、

ここまで恐ろしげに見えるものかと立ち入りを躊躇した。

「ほら行くぞ」

なのに昼間の酒が抜けぬ男は、何も気にせずズカズカと参道を歩いていく。

名を掲げる石碑も無い、誰も名の知らぬ山の社殿。

並ぶ御神木の幾つかは無残に切り倒され、境内付近の幾つかは、未だ立つ巨木に恨めしそうに寄り添い倒れていた。

無数の巨木の幹に黄色いテープが巻かれている。

いずれ同胞のように斬られると予定された黄色いテープ。風が吹くと一斉に闇の梢から葉擦れと共に音を立て、さらに物哀しさを色濃くさせている。

それに二人が肩をすくませて進むと。

「ひ!？」

「なんだ、ただの風だろ？」

「い、いえ、そこ、そこに生首が……!？」

男は示された水溜りをみて、一瞬ぎょっとしたが。

「こりゃ狛犬の顔だろうが。馬鹿かお前は」

砕かれた石畳を全て覆うように、巨大な水溜りが落ち葉を含んで揺らめいている。そこに重機で破壊された狛犬の欠片が無残に水溜まりの中に転がっていたのだ。

——そんな折りだ。

『やばい、何か出る！　これ何かいるよね!？』

場違いな、明るい声が参道へ響いてきた。

「な、なんの声ですか!？」

「うっせ、いちいち喚くな……まさか、俺達以外に金目の物を狙って誰か忍び込みやがったか」

『なんだ、これ……おまえか、囁いてたのは……?』

「久那（ひさな）。どうやら相手は数人いるらしいぜ」  
でぷりと太った男はゴキリと指の関節を鳴らしていく。

「き、金餅（きんぺい）さん、拙いですよ……帰りましょうよ」

「馬鹿かお前は、ここは元々俺の親父が懇意で管理してたんだ！　なら、もう俺の物と同じだろうが。そこから物をもつてくなら盗人——なに!？」

言葉が止まる。

突然、拝殿から強烈な蒼光が輝いたのだ。

その凄まじい輝きに久那は腰を抜かし、男は強烈な輝きを直視して呻きを上げた。

『一体、……これは何なんだ？』

社殿から声が続く。

それに金餅は苛立ちの声を放った。

「来い久那、盗まれちまうぞ！」

「で、でも!？」

「でもじゃねえ、早く来い！　他の業者に建築やらせっぞ！」

「そ、それは困りますよ!？」

壊れた賽銭箱を踏みつけ、二人は崩壊した拝殿へ駆け込んだ。

「——なにやってんだ、おめえ!!」

踏み込んだ二人が見たものは、黒のズボンにワイシャツ姿の男。年齢は十代半ばの子供だ。  
今時珍しい黒い髪、でも工事現場にいる様な男達とは違い、余りに頼りなくも体躯は細い。

しかも頭の上では二本のアホ毛が揺れている。

そのふざけた男の姿に、金餅の鼻に皺がよる。

重機で崩した拝殿の中には砕けた木材が縦横無尽に崩落を起こし、天空からの月光のみを屋内に招いている。

が——二人してその輝きを見て硬直した。

その子供の握っている物。

それは月光を煌めかす、どうみても長一脇差（ナガドス）だ。

自分らを差し置き、社殿に賊がいるとは思っていたが。まさかそんな物がひょっこり出てくるとは思わなくて。戦慄通り越して直面した現実硬直する。

「す、すみません!？」

子供は叫ぶ。

けど、台詞と行動が一致していない。

いきなり二人の元へ駆け出し、その太刀で月光をさらに煌めかせたのだ。

「ちょ、おま、刀!？」

「うわ、あぶねえええええええ!？」

叫ぶ久那が横転し、咄嗟に顔を腕で覆ったところを子供が跳ね飛んで境内へ飛び出していつてしまう。

「あの、あの野郎、何か盗んだんじゃねえか!？」

「ひいいい、ひいいい、斬られた、殺された!？」

「殺されてねえよ、立て、この馬鹿!」

「今の、今の誰だかわかりますか?」

「解んねえよ、顔隠していきやがった!　だがとっ捕まえて、盗んだの奪いとってやるぜ!」

「た、立たせて、腰が」

「なっさけねえ、立てオラ!」

叫ぶ金餅が久那を立たせると二人して一気に跳ねて賽銭箱の残骸に激しい音を立て着地する。

だが、どこをどう探しても誰もいない。

いや、代わりに二人は音を聴く。

『ねんね……ん、ころりりや……おころりりよ……』

風に乗る、柔らかな、それでいて異様に力のない歌声。

「ひい！ 今度はなんですか!？」

「知らねえ……だが、誰か来る……」

風が、強く境内に流れていく。

巨木を倒す印となる黄色いテープ。

そして周囲を山深く囲む鎮守の森。

バタバタバタ……

サララララ……

それらが一斉に、まるで何かに脅えるみたいに泣き喚きでも起こすような音を風に立て震えていく。さらにビュビュウと強い音の中、今の今まで酔っていた金餅も撫でられた冷たい風に生唾を飲んで、今まで自分らが歩いてきた道を睥睨する。

そこに、薄明かりを見たのだ。

二人は眼を凝視させ、そこに小さな蠟燭を皿に載せた何者かが迫るのをはつきりみた。

「ひい、出たああああああ、祟り、やっぱり祟りがああああああああ」

「ある訳ねえだろ、んな物！ みろ!! 足があるわ!」

喚く久那を置いて見定める金餅の網膜に飛び込む異質な人影は間違いなく女。

しかも懷に何かを抱いて、背中には何かを背負っている。

「なん……なんだ、あいつは……」

——オギヤ、オギヤ

場違いな、甲高くも耳に衝く声が境内に響いてくる。

しかも、音が収まれば風の音。

参道の木々が作る転々とした無数の闇の中、境内のみに広く降り注ぐ月光を求める様に。

その陽炎のような女はやってくる。

『ねーんねーん、ころりりやー。おころりりよ……』

坊(ぼう)やはよい子だ　ねんねしな……

坊やのおもりりは　どこへ行つたあ……

あゝのゝ山ゝこえて……

里へゝ行つた……

里のゝみやゝげゝに……何ゝ貰(もろ)つたあ……

でゝんでゝん太ゝ鼓にゝ一笙(しょう)のゝふえ……

金……の、手筈(てばこ)……に、銀の杖……

ねんねんゝおねむ……の……良いお児(こ)ゝよお……

ゆゝめゝゝのゝお、おさゝと……で……

ネンネゝシ……ナ……』

震える程か細い声で、そう子守唄は綴られていく。

「……」

異様に冷たい汗が二人の頬を伝っていく。

それを拭おうと金餅は腕を動かすが、何故かその指先すら動かない。

揺れる蠟燭に照らされて、長い衣を頭から被る女が近づいてくる。今時着る者も少ない煌びやかな和服の着物を纏って、まさかこんな時間に杜へ参拝だというのか。

さすがに金餅同様に、久那も啞然とするしかない。

連想するのは五寸釘でのお百度参り。けど、今は丑三つ時でもなければ、彼女は鬼女の格好もしていない。ただ煌びやかな着物を纏うだけだ。

それでも奇怪な女に変わりはなく。

二人は今にも潰れそうな心胆を必死に奮い立たせて、迫る女の一挙手一投足に注視を向けた。

揺れる様に歩む柳の様な女

衣から覗く鼻頭と、美しく朱が塗られた濡れそぼる唇。

そして着物姿。

凄まじい美人と解るが、それが余計に恐ろしい……

しかも何故こんな時刻に。

動向を探る金餅の隣。久那も美人とくれば、本来なら口笛でも吹きたいくらいの衝動はあった。けど、あまりに現れた場所や気配が異質過ぎて、ただ乾ききった喉元へ、なけなしの唾液を注ぐだけで精一杯。そしてそれは隣の金餅も同じらしく、喉元から妙に高い嚙下（えんげ）の音だけを響かせてきた。

そして……その女が、目の前で静かに歩みを止めた。

月明かりを浴び、和服を胸元まで肌蹴て、腕の両端と豊満な乳房で支えるように着込む姿は余りに妖艶だ。

いや、異常な程に美しい。

そして彼らの金縛りを解くように、彼女は噎せ返る程の牡丹の香りを振りまいている。そしてその艶やかな唇が動くのだ。

「……こんばんは……」

優し気な音色で、そう囁いた。

金餅はもう一度喉を鳴らす。

『なんだ、ただの女か……』と、返事を告げようと、一度瞬き。

——!?

途端、女が消えていた。

訳が分からず、金餅は呆気に参道を見続ける。

「ひっ!？」

と、声を上げたのは久那だ。

久那は背後を振り向いていた。つられて金餅も振り返れば、女が崩れた賽銭箱に二三枚の小錢を放って、二礼、そして四回掌打、そのまま再度の礼をした。

風が女の被る布を引きおろし、月明かりにカールの巻かれた明るい髪を露わにさせる。

「ただの……女だ。幽霊じゃねえよ」

掠れる声で金餅は言う。

そして振り返る女の美しさに、ようやく体は落ち着きを取り戻していた。

「な、なあ、あんた、なんだってこんな時間に、こんなところ来てんだい？」

下卑た笑みで笑いかけ、その艶めかしい腰に手を回したくて、さっそく近寄ろうとするのだが。何故か体が動かない。せいぜい動くのは首くらいで。

それは久那も同じらしく怯えた眼差しを金餅に向けていた。

「……素敵な殿方が、旅立ちまして……」

再びグズリ始める赤子をあやしながら、そのたれるような柔和な眼差しを柔らかな微笑で彩っていく。その美しさに胸を高鳴らせる二人の前に、女がふっと、眼前へ現れた。

「……な、なんだ……」

月明かりのせいか、一切動きの読めない女の挙措に再び二人へ恐怖が沸く。

賽銭箱から境内の真ん中に立つ二人の前には距離があった。

それが何もないように女は空間を飛び越えて眼前へ現れたのだ。

これには瞬く間に鳥肌がたっていく。

女は見定める様に二人を覗き込み。

やがて、動かない久那の手に燈明皿を無理やり持たせると。背中から包みの布を下ろした。

そのまま片手で布を解くと現れたのは一振りの納刀された鞘だった。

「これは、……貴方が相応しそうです」

女はそのまま久那から皿を受け取り、代わりに太刀を手渡した。

そこで、久那から金縛りは解けるのだが。

握らされた物が気になり、蒼い柄巻きに手を掛け静かに抜いてみる。

月明かりに輝くのは、不可思議な程に色濃い鉛色の太刀。

「それは、貴方の望みをかなえる事になる刀……」  
囁かれる女の言葉。

それに呼応するよう、太刀が、確かにブォンと鳴動したのだ。

ありえない現象。

不可解な空間で出会った異質な挙措の女。

だが、それがかえって女の台詞に妙な力を与えていく。

望みが叶う。そう告げられて喜ばない人間はいない。誰もが望む欲。本来なら誰も信じないだろう。けれど、それを出自不明の女から幻想的な月明かりの下で手渡されたのだ。

それだけで全てを鵜呑みに出来る。

そう思って久那は女の言葉にただ感嘆の声をあげる。

「お、俺には！ 俺にはねえのか！」

そんな久那に嫉妬、と同時に、この不思議な女に頼めば何かを貰えるかもしれない。

そんな欲を出して金餅が嬉々とした叫びを跳ね上げた。

それに女はもう一度燈明皿を、今度は金餅に握らせ……。

「……これは、貴方が相応しそうですね」

そう告げ、腰に下げた白布から一つの仮面と、そこから拾ったのだろうか枝を取り出した。

そしてその仮面を見て、男は酷く落胆する。

久那が握るような太刀と違い、金銭的にも価値がなさそうなのだ。

「な、なんでえ、きたねえ木面じゃんかよ……」

しかも……端には傷がついた、いかにも古臭い仮面だった。

ただ、女が次に告げる言葉は、男を喜色で染めあげさせた。

「これは、若返りの仮面です」

その言葉に、酒と果てのない脂身の摂取から得た頬の贅肉がぶるりと揺れる。

幾ら金が入っても決して手に入らない望み。

幾ら他人を使役しても叶わない望み。

……若返り。

その言葉を聞いて、男は発狂したような声をあげた。

「これがそうだったのか！」

迷いなく。それから引き起こす惨劇等を一切考えずに、その重大な行為に意識もせずに、男は急に動き出す腕ですぐに顔へ張り付けた。

そして女から渡された枝を握りしめる。

「その枝は、貴方の若さが固定するまで必要。……決して離さないで」

そのまま女が何か不思議な言葉を囁く。

それに呼応するように仮面が男の顔の中へ沈んでいくのだ。

「なんだ、なんか、きえ、消えちまったぞ……!? 仮面どこにいきやがった」

「たいした事じゃありません。握った枝は若さの固定。そして貴方に若返った者として、新たな名を差上げます。若返りを完全な物とする為に今日だけ貴方は……こう名乗りなさい」

「名……? 構わねえが、なんだそりゃ」

「……荒ぶりの君……」

女は、確かに男へそう告げた。

「荒ぶりの……君? ふん、なんか儀式っぽい名前だな。構わねえぜ。今日一日名乗ればいいんだな」

「ええ、それで貴方は本当に若返る」

「最高だな、おい！」

「ええ、本当に……最高ですよ。なぜなら、全ては虚栄に包まれた、まほろばなのですから」

「あんだ？ 何言ってるんだお前」

「世は全て謀（はかりごと）……」

「はかりごと？」

「ええ。全て全てが誑かし。その上では世の民は思考を失い、薄い布の上を歩く虫と成り果てる。少し力を入れ違えるだけで、瞬く間に……」

言葉が止まる。

それに男は耳を欹（そばた）て……帰らない言葉に眉根を寄せた。

「な、なんだよ、瞬く間に……よ」

暗がりの森。

そして人気のない社。

けど、女は、男二人を前に怖る事もなく、ただ妖艶に唇の両端を引き上げていく。血を含んだような、異様な赤。暗がりですえ鮮明に見える口腔の色がまろみ出て、男二人の背が総毛立っていく。

「……奈落へ消える……」

重く、地面から響くような。そして押し寄せる様な鈍い声。

ケラ、ケラケラ……ケラケラケラケラケラケラケラケラケラケラ

さらに女は奇怪な笑いを上げていく。

「なに、なにを……言ってるんだお前」

「金餅さん!？」

薄気味の悪い女。

それに視線を奪われた途端に背後から叫ばれた。余りの声量に金餅は全身で跳ね上がる。

「な、なんだ、お前は突然!」

「突然どころじゃないっすよ!」 姿が、すげえ、金餅さん、姿が変わっちまって、どうしちゃったんですか!」

「か、変わったって、俺がか? 別に、どうにも」

言われて顔をまさぐるが、何も変わった感じはしない。

しかし、その困惑する顔へ白月が柔らかな光を投げかけていく。

その顔は、前の仮面の所有者の顔。

それに女は赤い舌を自らの唇に這わせて喜悦に微笑んだ。

「いいから、どっか、あ、ほら、あの水溜りで顔みてくださいよ!」

久那の言葉に、もしやと金餅は駆けていく。

動きづらい足を必死に動かし、二人でもつれ、幾度か転げ、そして月明かりに沈む狛犬の顔の脇に自らの顔を晒していく。

「……うっそ……だろ……」

水溜りに映るのは月明かりの為に顔ははっきりしないが、脂肪など一切ない精悍な顔。

眼差しを隠す程の黒い前髪。

そしてスーツ等は消えてしまい、安物のワイシャツ姿がはっきり映り、しかも頭の上には二本の毛がピョコンと立っている。いずれにしろそれは十代半ばの姿で、いつのまにか握った枝は立派な太刀へと変化していた。

「若……返りだ。すげ、これ、本当に若返ったぞおおおおおおお!」

「すげえ、すごいですよ、じゃあ、俺の太刀も願いが叶うんだ!」

久那は悲鳴に近い歓喜の声をあげ。

そこで金餅がその肩を掴んだ。

「ちょっと待て、それ先に俺に使わせろ!」

「そんな殺生なこれを貰ったのは俺ですよ! てかもう太刀を持ってるじゃないですか」

「いいからそっちもよこ——」